

令和6年度 第1回恵庭市学力・体力向上推進会議 会議録

〔開催日時〕 令和6年7月22日（月）10：00～11：30

〔開催場所〕 恵庭市民会館 1階 第2会議室

〔出席者（敬称略・順不同）〕

委員／村越 含博（北海道文教大学）

高橋 和子（恵庭市PTA連合会）

吉田 かおり（恵庭市校長会）

山口 広宣（恵庭市教頭会）

佐々木 保（有識者）

北 幸法（学力向上アドバイザー）

平井 梓（恵庭市社会教育委員）

河内 紀彦（北海道ハイテクACアカデミー）

事務局／教育長、教育部長、教育部次長、教育総務課長、教育総務課主幹、
教育総務課主査・スタッフ

〔内 容〕

※委員長が選出されるまでの間、教育総務課長が進行

1. 開会
2. 委嘱状の交付 ※机上交付
3. 教育長挨拶
4. 会議の概要について

事務局より、次の内容について説明

【説明要旨】

今回、8名に委員をお願いした。任期は、昨年度から引き続きお願いしている方を含め、令和8年3月31日まで。会議は、本日を含め年3回の開催を予定。

本会議の設置要綱では、所掌事務として「全校の学校改善プラン及び体力向上プランの比較・検証」「ICT機器の整備・活用」「地域との連携・地域人材の支援」「地域における部活動の在り方」などの視点から、全市的な学力・体力の向上に係る事項について研究・協議することや、組織体制、会議の運営等について規定している。

委員への報酬及び旅費の支給は行わないが、公務以外での出席委員について、スポーツ安全協会の「スポーツ安全保険」に加入している。

5. 議事

1) 委員長及び副委員長の選出について

事務局案を提案し、委員の承認を得た。

⇒委員長は佐々木保委員、副委員長は村越委員に決定

※ここから、佐々木委員長が進行

2) 学力・体力向上の取組について

事務局より、配付資料について説明した後、意見交換を行うにあたり、資料1（令和6年度 学力体力向上に係る取組）の内容について次のとおり説明。

① 設置要綱について説明

改正が2点ある。1つ目は第二条について、地域における部活動のあり方というものに加えていたが、本年度から部活動の地域移行に関わる新たな組織を設置することとなったため、所掌からは削除。

2つ目は第三条について、文言を整理した。

② 学力向上について

「標準学力検査（NRT）」については、小学2年生から中学3年生までを対象に、毎年実施している。各校で結果を分析し、学習改善の取組に活用できることから、今後も継続して実施したい。

「英検I B A」については、平成30年度は中学2年生を対象に市独自で実施。令和元年度より北海道教育委員会の英語力向上事業として、中学1年生から3年生までを対象に実施した。本事業についても継続することで比較検証が可能となることから、引き続き実施していきたい。

「英検E S G」については、英検I B Aと同様に北海道教育委員会の英語力向上事業として、英語教育の充実を図るため令和4年度から小学校6年生を対象に実施している。

「ALTの配置、外国語指導に係る地域人材の活用」については、新学習指導要領に対応するため、令和元年度からALTを4名体制として小学校での地域人材の活用、外国語専科教員等の配置を行い、外国語教育に関わる指導の充実に努めていく。引き続き学校における学習状況を確認しながら、ALTや地域人材の指導時間の適正化について検討したい。

「教職員への研修」については、恵庭市教育委員会主催のサマーセミナー・ウインターセミナー（夏季・冬季休業中に実施）や、年に複数回実施しているGIGAスクール構想に係る研修（GIGAのミニ研修）、教職員等が中心になって開催している校内研修や小中連携の取組に関わる担当者研修等も実施している。引き続き研修内容の精査や充実を図り、教員の向上や質の高い授業に反映していきたい。

「ＩＣＴ教育の充実」については、一人一台端末や、電子黒板、指導者用デジタル教科書のほか、令和６年度には全校にデジタル教科書を導入した。また、ＩＣＴ支援員も昨年度から増員して体制の拡充を図っている。今年度は一人一台端末の更なる活用を促進し、教職員等への研修や児童生徒への情報モラル教育、情報リテラシーの推進を図るとともに、今後の端末更新に関わる検討も進めていきたい。

「学習支援員等の配置」については、平成２９年度から学習支援員を市の負担で１名配置していたが、令和６年度からは１名増員し、２名体制としている。また、普通学級において配慮が必要な児童生徒に対応するための特別支援教育支援員については本会議でのご意見を参考に、令和４年度より拡充をしている。

引き続き学力向上に関わる効果的な配置や人数等について検討していきたい。

「地域による学習指導」については、学生ボランティアの協力やコミュニティスクールの活動として、地域人材による学習指導などを行っている。また学校運営協議会については、令和３年度で全校に設置が完了しており、今後も地域住民との協働した取組みが学力向上に繋がるよう進めていきたい。

③ 体力向上について

「体育授業への支援」については、「北海道ハイテクＡＣアカデミー」から指導員を派遣し、体育授業で指導いただいております、学校からも好評で、効果的であると考えています。昨年度は本会議でも時数等の増加を意見としていただいていたが、引き続き効果的な取組や時数増等を検討したい。

「小学校水泳授業における民間プール施設等の活用」については、令和４年度から学校併設の市民プールの統廃合検討に伴い実施している。柏小学校、松恵小学校、恵み野小学校で実施していたが、島松小学校に併設されているプールの老朽化により、令和６年度は４校で実施しており、それ以外の４校には水泳のインストラクター派遣を併行して実施している。

「部活動の地域移行」については、令和２年度から、恵庭中学校の卓球部に１名を配置して以降、毎年１校１名ずつ増員し、本年度で全中学校に１名ずつ配置される予定となっており、専門的な指導を実施しているところ。これまでの生徒アンケートの結果では、多くの生徒が肯定的な評価をしているが、配置による効果を検証しながら、今後の在り方について検討していきたい。

【質疑応答要旨】

A委員：２点伺いたい。１点目は、ＩＣＴ教育の充実にかかり、一人一台端末が配布されて数年経過したが、機材の破損状況はどうか（破損、交換、全機入れ替え等なにか動きが今後あるのか）。２点目は、学習支援員等の配置にかかり、学校側から強い要望があるものな

のかどうか。

事務局：1点目について、正確な破損率は数字として持ち合わせていないが、多い月で20～30台の破損がある。全体として令和2年度末から4年の8月までに5,919台の端末を整備している中で、月数台から数十台程度の破損を確認している。破損内容としては、うっかり落としてしまった、水筒の水で水没した、最近では経年劣化でバッテリー等機器内部の破損が発生した。等が上げられる。

これらについては保険に加入しているため、保険会社に出して無償で交換・修理という形で対応している。

事務局：2点目について、過去には学校側からも要望があったが、現在は学力テストやNRTの結果も踏まえながら配置校を決めており、特に算数・数学を重点的に対応している状況にある。

事務局：補足だが、恵庭市の子どもたちは、国語は全国平均を超える状況が多いが、算数・数学については、全国に比べ若干低い状況にあるため、重点的に措置している。

B委員：NRTについて、継続科目の追加について検討と記載があるが、主にどの学年でどの教科の追加を検討しているのか。

事務局：本会議においても、これまで科目追加についてご意見をいただき、実際に反映した例がある。現状、小学校は2年～6年で国語・算数の2教科を実施しており、中学校は2年生と3年生が国語・数学・理科・社会・英語の5教科、1年生が国語・数学・理科・社会であったものを、令和5年度から英語を追加し5教科となっている。

今後追加できそうな科目として、小学校高学年の理科・社会を検討しており、この会議でも同様の意見をいただいたことがある。

6. 意見交換

事務局：市広報誌5月号にも3ページにわたり掲載したが、部活動の地域移行の内容について、委員の方が市民側としてどのように受け止められたのか、ご意見・ご感想をお伺いしたい。特にお子さんのいる委員については、保護者の目線でご意見を伺いたい。

B委員：私たち親世代の中学校時代と比べるとかなり状況が変わった印象である。特に学校の選択肢、部活の選択肢が少ないと感じる。広報誌ではサッカーの合同チームが取り上げられていたと思うが、指導者の負担軽減を考えると凄くいいと思う。しかし練習場所等を考えるといい刺激がある反面まだまだやりにくさ等の課題はあると感じる。以前は学校教員が部活動も見ていたため、普段の様子から部活動の様子まで幅広く見ることが出来たので良いバランスを保っていたと振り返るが、そのバランスの取り方や地域のコーチ方との情報共有について今後どのようにされていくのかは気になるところである。難しい部

分は多々あると思うが、地域移行が進んでいくと今は部活動にないスポーツ等が地域移行によって活動できるのではないかと期待しているところである。

事務局：ご意見を聞いて、市の広報の目的は達成できたと感じる。そういったご意見、お気持ちを聞けるだけでこちらはありがたく、嬉しく思う。

C委員：実際、息子がバドミントン部を希望していたが、男子部がなく諦めた例がある。部活動によって、男子部はあるが女子部はない等の選択肢の少なさから、公平さを感じないのが本音。他にもこの先生だから強い、せっかく素質があるのにこの先生の指導ではその素質をうまく活かせない、などもあると思うが、地域移行によってこの問題が少しでも解決してほしいと思う。

委員長：この部活動の検討する協議会について、日程的にはどんな感じで進んでいきそうか。

事務局：日程について、第1回目を8月下旬で調整しており、年に2～3回を予定している。また、現在委員の方に依頼をかけて、推薦をいただいている段階であり、準備を進めている状況である。

委員長：体力向上の部分で、D委員から何か意見はないか。

D委員：私も部活動の検討組織に係っているが、平等だけど公平さがなく、というのは凄くしっくりくる。競技となると、成績、人間性の教育のバランスが難しい。現場にいてわかるが、地域移行に関しては、部活動を指導するための指導員の配置と、地域にあるクラブチームにお任せするという2通りがあると思う。ただ、クラブチームだとみんな入れるという意味では平等だが、資金的な部分は平等じゃない。例えば、部活動だと補助が出るがクラブチームはそれがない。また、クラブチームの子たちは学校でどんな子なのかはわからないため、受け皿となる側の努力値が凄く必要になる。学校教育に結びつくよう私の所属するクラブチームでは、学校側にその子のクラブでの様子、競技成績等に所見を併せて情報提供している。そうすることで、たとえ帰宅部だとしても学校以外でなにを頑張っているのかがわかるようにしている。しかし受け皿クラブチームの負担が凄くかかっているのが現状。その受け皿の努力と、市との連携が重要だと感じる。物・人・金っていうこの三つのワードをどうクリアするかが難しい。こういった場でも様々な意見が出て教育委員会とも直接話しながら、何かいい方法が生まれればと思っているが、まだ具体的な意見としては出てこないなので、現場でもうちちょっとできることがないかと反省することもある。検討組織の中でも学校教員や現場で動いている方たちから意見をもらいながら、そこでの情報もここで発信させていただきたい。現在部活動に係わっている先生方がどういう方で、どういう資金をもとに、どのように実施しているか等がわかってくると、少し変化も見えてくると思うので、より詳しい情報を私達の方で把握した方がいいと思う。

委員長：恵庭市教育委員会への要望等はなにかあるか。

D委員：たくさんあるが、前提として恵庭市は恵まれた場所だと思っている。他の自治体と比べて大会に関する補助金の対象が広く、教育委員会とのやり取りもすごくやりやすいと感じる。それでも、地域移行に関しては国の目指す形を実現するのはすごく先の話になると思う。要望するのであれば、小学校に派遣している体育授業支援、中学校体育授業、部活動に係わる取組について、成果・実績を数値化するのが現状難しいので、明確な指標等があれば、より現場の人間が努力できるのではないかなと思う。例えば、部活動指導員の方がどんな方で、どういう実績が出ているか。これは競技力だけじゃなく、部員数が増えた、やる気がある子たちができた、などの主観的な情報も含めて評価できるものがあるのではないかなと思う。

事務局：小学校の派遣授業では、子どもたちは本当に熱心に取り組み、先生方も指導方法を学んでおり、凄く意味のある事業だと感じている。こういった状況を踏まえ、学校側の派遣授業に対する受け止めをお伺いしたい。

E委員：走り方について動画で撮影し、休み時間や給食時間に放映したり、運動会期間にはポイントを添えた写真を廊下に貼ったりして、子どもたちにはすごく勉強になっていると感じる。また、水泳学習では、上達するのが早く、水が好きになったなど実感もしている。事情があって水泳に参加できなかった子たちにも、プール授業の一環として動画も活用しながら指導内容等も伝えられれば、次の授業でも取り残されることがないのかなと感じている。

F教頭：体育の授業で指導者派遣があるのは、他の自治体ではあまり聞いたことがないので、恵庭市では手厚い対応をしていると思う。数値的にも小学校男女ともに50m走の平均が北海道の平均よりも速いというのは、こうした取組のおかげでもあると思うし、水泳に関しても指導員が来てもらえるのはありがたいと実感している。

A委員：事業の実情と評価の部分で大事にしなければならないのが、小学校教育における体育の学習指導要領上の目的は何か、学習指導要領でどう規定されているかだと思う。いわゆる生涯にわたって運動・スポーツを楽しむというところがまず前提にあり、一つのきっかけとして記録が伸びた、タイムが縮んだということになる。運動能力の数値的目標はある種目的の一つでもあるが、最終的な目標が何なのか考えると数値ではないはずだが、数値だけが焦点化される。教育はどうしても方法が目的化してしまう傾向にあるので、教育の目的という全体像を考えたときに、その子が人生を豊かに生きていくことを踏まえた中で、どういう点を意識して評価していくかが大事になってくる。先ほど話にあった地域移行の件で、受け皿としての負担がすごく増えたというのは非常に象徴的だなと思っており、地域移行の話を大学でも聞いていくと、先生方は今までこれだけの取組をやっていたんだという話題がでてくる。つまり生徒指導と部活動指導を絡めてやって、尚且つ強化指

導をやっており、それを地域移行で地域クラブチームが担う際に手厚いとされている指導やケアを、これまでは学校の先生方がずっと担ってきたということが顕在化してきたということだと思う。地域移行になったときに、競技の部分でいくのか、子どもたちの総合的な発達の面でいくのか、どちらを取るのか迫られている部分は若干あるかなと思う。地域移行にして、部活動であったような生徒指導も地域移行でというのは、やはり変えにくい部分があるため、保護者の方も含めて、市や地域クラブチームがある程度共通の認識に立つということがかなり大事になってくる。資金的なものも含めて、やれない部分や担えない部分に気づくこともあると思うので、ある程度冷静に議論を進めていくと、前に進んでいくのかなと感じている。

B委員：部活動の地域移行に関して、自分の子もクラブチームで活動していたが、部活動にはない種目だった。中学校でも続けていたが、クラブでは競技力の向上が期待できるし、特化している面がある。その代わり、クラブチームは学校として競技に参加しないため、学校としての評価は特にない。クラブチームと部活動では全く違うものだ実感している。教員の部活動指導は、業務量が多く、休みの時間や家族の時間が削られてしまう現状は理解しており、地域移行が教員の負担軽減という点ではすごくいいと思っている。ただ、地域移行によって他の学校の子たちと一緒にクラブチームで活動する場合に、何の大会に出場できるのか、中体連は対象なのか、等の問題点は重要な判断材料だと感じる。また、部活動が地域移行したクラブチームが、以前から競技に集中して競技力を上げてきたクラブチームの子たちと同じ土俵で戦うのは相当厳しいと感じるため、競技によって慎重に判断しなければいけない部分で、子どもたちの競技の選択肢が増えることはいいことだが、部活動の良さを損なわれないよう配慮することも考えなければいけないと思う。

事務局：なお、中体連については、部活動の地域移行に向けて取扱いが改定されており、地域クラブチームも大会に参加できることとなっている。また新たな部活動組織の状況提供についても随時行っていきたいと思う。

委員長：学力向上について、日々子供たちと関わっている立場から、何かご意見ないか。

E委員：アンダーアチーバーとオーバーアチーバーを考えたときに、自校においてはアンダーアチーバーの数が多いため、教員が頑張らなければならない。子供たちの本来持っている力をしっかり引き出して、壁を乗り越えられるようにするためにはどうしたらいいかということに対して、教員の授業力向上をしっかり頑張りたいと考えている。

F委員：全体的に、やはり算数に課題があると感じている。塾等に通っている児童も一定数いるが、それでも思うように改善していないことから、非常に難しい問題だと捉えている。もちろん、数値だけが学習の成果ではないと思っているが、子どもたちの将来を見据えた時に、算数が苦手なままではよくない。校内の意見としては、例えば

九九や割り算といった基礎的な計算力の低さが課題である一方、NRT や全国学力調査等ではまた違った能力を求められる部分もあるので、非常に悩ましい。また、家庭学習については多くの子どもたちが取り組んでくれているが、その学習内容を児童生徒に任せてしまっている部分もあるので、アドバイスやフォロー等で学校側からのアプローチが弱いとも感じている。NRT など様々な検査、試験があるが問題にきちんと向かっていけないといつまでも出来るようにはならないため、学校側からのアドバイス等もしていかないといけない。そんな中デジタルドリルを導入してもらったことはありがたく、課題に対してうまく活用していきたいと考えている。

委員長：最後にG委員、これまでのご意見を踏まえ、まとめをお願いしたい。

G委員：小中学校で取り組んでいる学習指導要領、これは文科省で出している教育活動全ての内容を計画的に盛り込んだ基準であるが、現在の形に変わった時は今までの歴史を変えるくらい画期的なものであった。それに加えて一人一台端末の導入により、主体的、対話的で深い学びを達成するための授業改善が求められている。様々な新しい要素が盛り込まれ、学校側は大変な時代を迎えている。先ほども委員から話があったように、気を付けなければならない点として、対話的な学びのために会話が目的となってしまう、学校が取り組みたいことができない。一人一台端末の活用について、端末をとにかく使わせることが目的となってしまう。こういう陥りやすいところに陥らないようにすることが大切である。スマホを所持する年齢が早まってきていたり、ゲームで学習ができたり、情報についてもネットから収集するなど、時代の変化に沿ってやり方が変わってきている中、何をゴールにし、何を目的とするのかを明確にしながら、そのためにどういう支援ができるかを考えなければならない。学校、教員は間違いなく頑張っているが、色々なことに振り回されず、昔から言われているように授業をきっちり大事にすることを頑張ってほしい。子どもが理解できない時に、大学生が勉強を教えたり、ハイテクACからも指導に来てもらっている。こうした色々な施策のおかげで学校も助かっていると思うので、こういう場の議論も含めて、学校の取組に還元し、応援してもらいたい。

7. 次回の会議日程について

8. 閉会